自然界のきびしさ

西部中・1　中村　悠人

少し暑い六月下旬、家にあと少しという下校中、日光がじりじりと体の表面をあぶるように当たる。

一週間前ぐらいのこと。クモの巣に引っかかったハエがいた。「自分だったら頑張って抜け出せる。自然界は少し甘いな。」その甘い考えが覆る出来事が起きた。

家に着いた。駐車場に葉っぱのような茶色、白色のものが落ちている。自転車を停め見に行くと、スズメのひなが倒れていた。そのとたん、心臓がドキュンと跳ね上がった。生きているかとても心配になった。一回家に入って、母に連絡をして、返事が返ってくるまでの間、ゴム手袋を探した。小さい器に水を入れる。母からの返事。「様子を見てみて。」

外に出て、ひなのところに行った。ゴム手袋をはめて触ってみると、反応はない。近くに親はいないようだ。心臓のところを触ってみると、止まっている。もう一回周りを見た。兄弟、友達が空から見ているかもしれない。だけどやはりいない。羽毛があるから、飛ぶ練習をしていたのかもしれない。壁に当たってしまったのかもしれない。飛んでいるときに、熱中症になって地面に落ちたかもしれない。いろいろな考えが頭の中から出てくる。とても心が痛い。目の奥から涙が出てきそうだった。まだ生きていてほしい。そう思い、水を口の中に少し入れてあげた。親に捨てられたのかもしれない。ほんの少し、心臓を軽く押してみた。けれども反応がない。

親が戻ってくるかもしれない、そう信じて水の入った器を置いたまま、いったん家に入った。窓から様子を見ながら、クラスのみんなにどうすれば良いか連絡してみた。みんなからの返事は、「かわいそう。」「どうすれば良いのか僕は分からない。」みんな初めてのことらしく、どうすれば良いのか分からなかったのだ。

十分くらい待っても来なかった。三十分後まだ来なかった。外に出て、周りを見てもいない。親が来ないのは、捨てられたのか、親が死んでしまったのか。もう頭が推理だらけになってしまった。

人間は楽でいいな。病気にかかっても病院に行けば治るし、怪我をしても治る。食料にも困らない。

だけど自然界には、病院はない。怪我は自力で治さないといけない。食料は自分で取らないと生きていけない。外敵から身を守らないといけない。

今、自分にできることをやろうと思った。口を少し開けて、水を少し指先に乗せて口に入れる。自分の体で日陰を作る。できるだけ熱中症にならないようにする。

人間がいなかったら、地球は異常にはなっていなかった。建物のせいで自分の住むところが無くなる。そういう動物もいるだろう。海にも、分解できないゴミもある。自然の中にもたくさんのゴミも、大量に殺された動物もいる。人間がいても、動物たちに良いことは何もないのではないかと思ってしまう。

心臓を軽く押して、息を吹き返してくれないかずっと願っていた。何回も何回もそのひなに自分は謝っていた。

「ごめんね。ごめんね。人間がいなかったらもっと生きられたかもしれないのに。本当にごめんね。」

最後まで付き添うことを決めた。自然界はときには温かく、ときには冷たい。自然界は誰の味方でもない。そこが自然の厳しいところだと思う。その中でも頑張って生きている動物もいる。その動物を自分はとても尊敬する。みんなが自然のことを尊敬すれば、動物とのうまい生存ができ、環境問題が少なくなるかもしれないと思う。

はっと我に返った。ひなはまだ倒れている。迷いが出始めた。
「本当にまだ息をするのだろうか。」
と思ったが、すぐに、自分ができることを精いっぱいやろう、このひなのために。そう心に誓った。
そして母が帰ってきた。母と一緒に相談をし、悩みに悩みまくった。本当にどうすれば良いのか分からなかった。
しばらくして、習い事があり、そっちへ向かった。習い事中もずっとあのひなのことで頭がいっぱいだった。先生からのお話も全然頭に入ってこなかった。
習い事が終わり、帰るときもあのひなのことを考えていた。本当にかわいそうとずっと思っていた。心が内側からちくちくと傷みだす。心臓に穴が開きそうだった。そのくらい悲しかった。
家に帰って、玄関をくぐり、リビングに向かった。母と、ひなをどうするのか、このままにしておくのか、何度も相談をした。そして母がこう言った。
「あとはお母さんに任せて。」
母のことを信じて任せた。そのあとは、どうしたのか分からない。けれども、ちゃんとしてくれたのではないかと思う。
ＳＮＳで動画を見ていると、自然にいる動物の動画が流れてくる。ペンギンは、卵を温めるときは片方の親が海へエサを取りに、もう片方の親が一か月間卵を温める。そして交代交代で卵を温める。海へ行く親鳥は命がけである。アザラシに食べられるし、シャチにも食べられる可能性がある。でもエサを取らないと卵と家族が死んでしまう。そういう実際の動画を見た。天敵にかまれて血が出ているのに、ふらふらにもなりながら、家族のところへ行く。そのあと残念ながら力尽きて倒れてしまったけれど、頑張っていてすごいと思った。だけど自然界の厳しさは、家族には会わせない。自分の甘い考えに後悔した。
あのひなは、人間が起こしたいろいろなもののせいで死んでしまったのかもしれない。だが、世界のどこかでは、自然界の厳しさに耐えながら生きている動物もいる。死んでしまう動物もいる。そこが自然界の厳しさだと思う。自分でエサを取らなければ死ぬ。常に周りを見ていないと、おそわれて死ぬ。怪我は自分で治さなければ死ぬ。常に死と隣り合わせなのが自然界の厳しさだと改めて思った。

７・９